

書評

田中さをり著

『時間解体新書——手話と産みの空間ではじめる』

(明石書店、2021年)

石原 和

本書の最大の特徴は、手話を用いて哲学の議論を展開するという点にある。

私は2016年からろう者や手話に関わる仕事をしてきたが、ここ1、2年の手話への関心や認知度の急激な高まりに驚いている。というのも、2016年に障害者差別解消法が施行されてから関わった通訳者手配や会議運営では、常に手話に対する（自分を含む）社会的な無関心と無知に対峙してきたからである。ところが、コロナ禍で行政の会見に手話通訳がテレビの画角に収められるようになり、東京オリンピックの閉会式、パラリンピックの開会式・閉会式の中継にも手話通訳が付与された。昨年は手話が用いられるドラマも2期連続で続いた。学問の世界でも、国際手話学会が昨年日本で開催され、言語学以外の学会でも手話通訳が付与されはじめている（文化人類学会など）。

本書もこうした近年の手話をめぐる転回を背景にして誕生したものと位置づけられよう。

本書の主題は、時間の非実在を説くジョン・マクタガートの時間論の再解釈にある。この議論は、その後の分析哲学（思考を支える言語や論理関係に注目する哲学）に影響を与えたものである。著者によれば、マクタガートの時間の構造の分析には、「視点のズレ」が見逃されており、ゆえに彼の議論は「失敗」しているという。これに対し、著者は自らの家族、学習、子育て経験に基づく、二つの視点を提起する。

その一つが、手話である。手話とは、ジェスチャーとは違い、音声言語と同様に文法を持つ言語である。しかし視覚言語であるという点に音声言語との決定的な違いがある。声や文字でなく、話者のまわりの空間を用いて、手型（しゅけい）と動き、その方向、表情などを組み合わせて話す。時間経過を表す場合、自分の体の後ろ側を過去、前側を未来とする。手話では、こうした過去から未来の軸を示す空間の中に、自ら（ある主体）の

時間的な位置を視覚的に示し、その地点からより先、より後という形である出来事を示すことができる。また、主体の位置や向きを動かすことによって、視点や視線を変更することができる。

本書では、かかる手話の特徴をもって、マクタガートがおこなった音声言語の記述という形では表せられない時間論を分析する。それによって、マクタガートの時間論には、時間の構造を疑う議論であるにもかかわらず、あらかじめ時間が流れる向きが自明視されているという矛盾がある点、ある出来事が現実化していく過程は誰かの現実でしかありえないものであるのに、誰のものでもないものとして描き出されている点に問題があると指摘される。

またもう一つの視点として、産む性という視点を挙げています。これは、マクタガートの時間論の問題の「誰のものでもない現実」の克服の方法として提起される。すなわち、「現実」を捉える見方として、産む主体に出来事が現実化していく過程を捕捉しようとする。

これらの二つの視点は、著者自身も述べる通り、①音声言語中心に進められてきた哲学の議論に対して手話という視点を示した点、②産みの問題から男性中心の哲学に対峙しようとしたという点において新しさがある。

一方で、その裏返しなのであるが、たびたび手話が言語と認識されていなかった過去の議論に対して、現代の価値観からろう者、手話への無知が糾弾される。歴史学を専門とする評者には、時代性を踏まえていない点において正当な批判とは思えない。また、産む性という視点は、産まないという選択や産めない事情を切り捨てる視点でもある。このように著者の「等身大」の思考から手話や女性の「代弁者」になって饒舌に語る節があり、サバルタン・スタディーが抱えた問題を孕んだ議論となっているのではないか。実はこの点には、現代の手話、ろう者をめぐる諸問題（「代弁者」になって語る／ならないと語れない）の一端が垣間見える。特に記述日本語を母語としないろう者について、聴者が語ることには、より多方面からの抑圧を生じてしまうことは理解しておく必要がある。